

相撲の授業で女子もふんどし姿にされた話

体育館では、生徒たちは今日の体育が何になるのかと期待と不安でいっぱいだった。先生が静かに体育館に入って来て言葉を発した瞬間、ざわめきが一斉に静まった。

「今日の体育は、相撲の授業です！」と先生が告げると、生徒たちから不満が爆発した。

「相撲かよー、やりたくねー！」「マジで？」
「嫌だよ！」

先生は厳しい表情を浮かべ、声を張り上げた。

「うるさい！静かにしなさい。今から、全員ふんどし姿になってください！」

命令に、生徒たちの中で反発の嵐が吹き荒れた。

「ありえねー！」「冗談じゃない！」「何考えてんの？」

だが、先生は容赦なく続けた。

「男子から早く服を脱いで！」

男子たちは、「最悪だ...」、「マジかよ...」と呟きながらも、女子の視線を意識し、渋々と脱衣を開始した。

拓也は長身で、バスケットボール部のエース。シャツを脱ぐと、引き締まった腹筋と胸筋がはっきりと見え、女子たちから「うわ...」という驚きの声が漏れた。ズボンを下ろすと、黒いトランクスが現れ、それも躊躇なく脱ぎ捨てた。全裸になった彼は、男子としての威厳を示す堂々とした姿勢を取った。おちんちんはまだ縮こまっていたが、女子の視線を浴びると、徐々に硬くなっていく。彼の勃起は、見る見るうちに成長し、先端が赤らみ、ピクピクと震え始めた。海香は「え、なんで勃ってるの...」と呟き、利奈は目を逸らしながらも、「どうしよう...」と内心で言う。拓也のおちんちん

は、長く太く、先端から透明な液体がにじんでいた。

大介は、明るい性格が表情ににじむ。ズボンを下ろし、下着も脱ぎ終え、彼の存在感が一層増した。彼のおちんちんは、女子たちの視線を感じると、徐々に勃起し始め、太さと長さが目立つようになった。利奈は「大介も勃ってる...」と顔をそむけ、郁香は「うわ...」と小さな声を上げた。太く力強いおちんちんが、彼女たちの視線を釘付けにした。大介の勃起は、太く短く、先端が赤く膨れ上がっていた。

和也は小柄だが、意外なほど筋肉質で、シャツを脱ぐと、女子たちが「意外...」と囁く。ズボンを脱ぎ、下着も落とすと、彼の体から溢れるエネルギーが感じられた。彼のおちんちんは、硬く立ち上がり、ピクピクと震えながら存在感を示した。郁香は「信じられない...」と目を見張り、奈緒は「どうしよう...」と困惑した。和也のおちんちんは、長くしなやかで、その動きが興奮を伝える。

健は神経質そうな表情で、服を脱ぎながらも目をそらす。ズボンを下ろすと、彼の細身の体から下着が脱げ、全身が緊張に包まれた。彼のおちんちんは、女子の視線に反応して、徐々に硬さを増し、先端から透明な液体がにじみ出始めた。奈緒は「大丈夫？」と小さく声をかけ、咲は「うわ...」と驚いた。健のおちんちんは、直立しながらも少し曲がり、その緊張感が伝わってきた。

慎吾はおどおどした雰囲気、ゆっくりと服を脱ぎ、下着を脱ぐと、彼のまだ発展途上の少年っぽい体が現れた。彼のおちんちんは、女子の視線に圧倒されながらも、硬く立ち上がり、ピクピクと動き始めた。咲は「動いてる...」と言い、海香は「やめて...」と小さく呟く。慎吾のおちんちんは、まだ成長途上で、その幼さが逆に女子の目を惹きつけた。

「全員、気をつけ！」と先生が命じると、男子たちは女子の視線を感じながらも、姿勢を正した。

拓也の身体は、男子としての堂々とした姿勢を取っていたが、女子の視線に興奮し、おちんちんが硬くなっている。「やばい、収まらない...」と心の中で呟きながらも、興奮を抑えられなかった。女子たちは彼の硬く立ったおちんちんに「うわ...」と驚きの声を上げる。海香は「最低...」と小声で呟く。拓也の勃起は、彼女たちの視線を一身に集め、特に海香はその大きさに見とれていた。彼のおちんちんは、光沢のある亀頭を張り詰めさせ、先端から透明な液体がにじみ出していた。海香の視線は、彼のおちんちんの先端から離れず、彼女自身の心臓が早鐘を打つ。

大介のおちんちんも相変わらず勃起している。「見られてる...」と意識しながらも、勃起が止まらない。利奈は彼の大きなおちんちんに「うわ、どうしよう...」と困惑。彼女の視線が大介のおちんちんに釘付けに。彼の勃起は、太く短く、先端が赤く膨れていた。

和也も勃起をして、おちんちんがピクピク脈を打っている。「女子に見られるの恥ずかしい

けど、なんか興奮する...」と内心で感じる。郁香は彼の脈打っているおちんちんに見とれ、「信じられない...」と驚く。彼女は和也の硬いおちんちんに目をやり、頬を赤らめる。和也の勃起は、長くしなやかで、脈動するのが見て取れた。彼が呼吸をする度に、おちんちんがピクピクと興奮を示す。郁香は「すごい...」と内心で言い、興奮を隠せない。

健は表情に緊張が走り、身体も硬直しながらおちんちんが大きくなっていく。「どうしよう...」と混乱している。奈緒は「さすがに興奮しすぎじゃない...？」と小さく声をかけつつ、彼の勃起に驚いていた。健のおちんちんは、直立し、先端がわずかに曲がっていた。彼の緊張が、その硬さと曲がり具合にそのまま反映されていた。奈緒は「見たくない...」と小さく呟くが、彼の反応に驚きを隠せない。

慎吾の小さなおちんちんも、興奮に反応して勃起が見られた。「見んなよ...」と小さく呟く。咲は彼の小さなおちんちんに「かわいい...」と内心で言う。彼女は慎吾のおちんちんに見と

れ、純粹な驚きを隠せなかった。彼のおちんちんは、まだ成長途上で、勃起しても先端が川に包まれていた。その幼さは、女子たちの視線を引きつける。咲は「包茎だ...」と内心で言い、羞恥心を感じながらもその純真さに見とれる。

女子の視線にさらされ、男子たちのおちんちんは限界まで膨れ上がった。拓也は「止まんねえよ...」と内心で呟きながらも、興奮を抑えられなかった。

「女子は男子のふんどしをつける手伝いをしなさい」と先生が命令した。女子たちは一列に並んでいる全裸の男子の後ろに渋々並び、ふんどしを持ちながら男子のおしりに近づいた。